**「『日本のために何かをしたい』というスワーミー・ヴィヴェーカーナンダの願いを叶える」**

*The Bengali Association of Tokyo in Japan(ベンガル人協会)出版の『アンジャリ』誌に掲載されたスワーミー・メーダサーナンダへのインタビューの抜粋。*

（アンジャリ誌のことば） 今年は日印の国交樹立70周年で、両国では数多くの記念行事が行われていることから、話のテーマが決まりました。両国の国交の強化は、さまざまな個人、非政府レベルでの粘り強い努力が求められる課題であり、私たち全員が認識している事実です。両国の「人と人との関係」をより良くするためにこれまで行われてきた一連の試みが本当の意味で一般に広く知られ、認められる必要があります。このことはたいへん大切な意義深いことです。個人団体が、黙々と誰にも気づかれることなく苦労を重ね、この目標に向かって屈することなく推し進めるという態度は、目に見える状況だけで判断する傾向のある一般人には容易に理解できないことです。もしも、人々および非政府組織が陰ながらこれまでどのような役割を果たし、長期的な影響を生み出 してきたか、ということを理解したければ、現状に対するより深い洞察が不可欠です。インドと日本の絆を強めようと頑張っている非政府組織について考えたとき、最初にあがった名前は日本ヴェーダーンタ協会でした。というのは、日本ヴェーダーンタ協会は長年にわたり日本で非常に貴重な奉仕をしており、私たちはそのことをより多くの人々が知ることが重要である、と考えたからです。そこで日本ヴェーダーンタ協会についての話を『アンジャリ』で取り上げるのがふさわしいと判断しました。私たちの主な狙いは、日本ヴェーダーンタ協会がどのようにその旅を始めたのか、霊的な組織として長年 にわたり、インドと日本の文化的および霊的な関係の構築にどのように貢献してきたか、ということをしっかりと調査することでした。こうした思いで私たちは日本ヴェーダーンタ協会のスワーミー・メーダサーナンダ・マハーラージに質問しました。

**ガウタム**

マハーラージ、アンジャリ誌を代表してお伺いします。日本ヴェーダーンタ協会の長として、そして日本に常駐の僧侶として、協会と協会のさまざまな貢献について簡単に紹介していただけますか？

**マハーラージ**

まず、日本ヴェーダーンタ協会の実体を知らない人が多い、ということをはっきりさせておきましょう。協会の英語名は「 the Vedanta Society of Japan」ですが、そのことからも多くの人は、日本ヴェーダーンタ協会がインドに本部を置くラーマクリシュナ・ミッションの日本での唯一の支部であることが分かりません。インド以外の多くの国にもラーマクリシュナ・ミッションの支部があり、それらのほとんどは「the Vedanta Society（ヴェーダーンタ協会）」という名称です。なぜだと思いますか？ それは、インドに関心をもつ多くの人々はシュリー・ラーマクリシュナを知らなくても、ヴェーダ ーンタ哲学については何かしら知っているからです。ですので、インド国外にあるラーマクリシュナ・ミッション支部はヴェーダーンタ協会として知られています。ヴェーダーンタとはインドの最も古い哲学の一つで、その教えは普遍的です。現在、この哲学の手本となるのは、シュリー・ラーマクリシュナとスワーミー・ヴィヴェーカーナンダの生涯です。シュリー・ラーマクリシュナとスワーミー・ヴィヴェーカーナンダの生涯と彼らの教えに照らしてヴェーダーンタのメッセージを広めることは、世界中のラーマクリシュナ・ミッションの目標の中核であり、実際のところ、日本のヴェーダーンタ協会も同じ目的です。

『アンジャリ』の読者の皆さんはほとんどがインド人なので、ラーマクリ シュナ・ミッションの紹介はあまり必要ないですね。皆さんはすでにラーマ クリシュナ・ミッションについてある程度ご存じですから。社会への貢献に関するご質問の答えに入る前に、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの著述から、今回のテーマに関係のある部分を読みます。スワーミー・ヴィヴェーカーナンダは早くも 1897年頃に、「インドと日本のつながりを確立することは非常に望ましい」という重要な発言をなさいました。著名な詩人であり日印関係の先駆者であるラビンドラナート・タゴールが初めて日本を訪れたのは、1897年のスワーミー・ヴィヴェーカーナンダのこの発言から約 20年も経ってからである、という事実を心に留めておいてください。人々はタゴールと日本との関係、そして日本とタゴールの関係について多くのことを知っていますが、それよりずっと前にスワーミー・ヴィヴェーカーナンダは「インドと日本のつながりを確立することは非常に望ましい」と認識していた、という事実を知る人はほとんどいません。 そしてここで重要なポイントは、インドと日本の関係を築くことはスワーミー・ヴィヴェーカーナンダの願いであることと、その願いのために私たちが努力している、ということです。

ご存知のように、他国との国交は「人と人の関係」がベースでなければ、表面的なものになってしまいます。ですので、国交は人と人とのしっかりとした基盤の上に立つべきなのです。それに関しては政府の機関ができることは限られています。そのような関係を築くのに重要な役割を果たすのは、主に民間の自発的な団体です。加えて言うと、そのような関係は相互の努力によって進められるべきことです。つまり、インドと日本の奉仕団体は同じ目的に向かって取り組むべきなのです。

次に、インドと日本の絆を築きたい、というスワーミージーの願いを日本ヴェーダーンタ協会がどのように実現しているのか、ということをみていきましょう。このことに関して、私はもう一度スワーミージーの別の発言を引用したいと思います。スワーミージーがその言葉を述べたのは、彼の生涯最後の日でした（彼は1902年7月4日にこの世を去りました)。 その言葉とは「私は日本のために何かしたいです。これは非常に意味深い意見です。なぜスワーミージーはそう言ったのでしょうか？ その理由はこうです。そのとき、日本の著名な美術史家である岡倉天心がインドを訪れており、そのイン ド訪問の重要な目的はスワーミージーを日本に招待することでした。当時、岡倉天心はタゴール一家をはじめ他の著名なインド人について何も知りませんでした。しかし、スワーミージーと親しかったアメリカ人のある信者が日本を訪れ、岡倉天心から芸術を学んだことから、岡倉はスワーミージーのことを知るようになりました。岡倉はスワーミージーを日本に招き、日本人の霊性の復興のために講演をしてほしい、と考えたのです。

織田得能（おだとくのう）という別の仏教の僧侶も同じ目的でインドに来ていましたが、偶然にも岡倉と織田は友達でした。明治天皇も、ボンベイの日本領事を通じてスワーミージーに日本を訪問するよう招待していましたが、体調不良とスワーミージーの心の中で他の何かが働き始めていたことから、 最終的に日本への渡航はできませんでした。日本の人々が熱心にスワーミージーの来訪を望んでいたにもかかわらず、スワーミージーの健康状態が良くなかったので、それは叶わなかった。そういったことが当時スワーミージーの頭を悩ませていたのかもしれません。そしてそれが「日本のために何かをしなければならない」という言葉につながったのではないでしょうか。私の個人的な確固たる信念は、スワーミージーは私たちを通して、つまり私たちの協会を通して彼の最後の願いを叶えている、ということです。そして私たちのすべての活動はこの観点からとらえられるべきです。スワーミージーは今も別次元から私たちを通してご自身の望みを実現しており、私たちは単に彼の道具として奉仕しているだけなのです。

**ガウタム**

マハーラージ、ありがとうございます。

さて、読者の皆さんは、日本ヴェーダーンタ協会が発足した時期や経緯を知りたいのではないでしょうか。当初は名前も今とは別の名前だったのではありませんか。始まりはどのようなものだったのですか？

**マハーラージ**

実際、一定の在日インド人や日本人の学者はスワーミー・ヴィヴェーカーナンダについて、いくらかの知識はあったし、先ほど申し上げたように、岡倉天心はインドに渡航しました。ですから、彼や他のつながりを通して、人々はシュリー・ラーマクリシュナ、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ、そしてラーマクリシュナ・ミッションについて知っていました。また、研究のためにインドに旅し、最終的にコルカタ大学でパーリ語の講師になった木村教授という人物もいました。［一］　コルカタ滞在中、彼はベルル・マトを訪れ、シュリー・ラーマクリシュナとスワーミー・ヴィヴェーカーナンダについての知識を身につけ、後に日本に戻りました。つまり、シュリー・ラーマクリシュナとスワーミー・ヴィヴェーカーナンダについて知っていた日本の知識人が確かにいたということです。

国際的に有名な講演者で、ラーマクリシュナ僧団の僧侶であり後に僧団長を務めたスワーミー・ランガナターナンダは、外国でインドの文化と文明に関する講演を行うために、インド政府後援の文化大使となりました。ランガナターナンダジーは日本を含む東アジアのさまざまな地域で数多くの講演をしました。いくつかの主要な日本の大学でも多くの講演をしたのです。1958年にインド大使館で講演が行われた時に、シュリー・ラーマクリシュナ、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ、そしてヴェーダーンタの教えを広めるための組織を設立するというアイデアを初めて提案しました。ランガナターナンダジーのインスピレーションの下、ラーマクリシュナ・ミッションと比較的良好な関係にあった木村教授と中村一教授(インドに関する日本を代表する学者)、スミトラ・ラオ氏(退役軍人で同盟軍のメンバー)、そして講演会に参加した日印の有志がこのことに興味を持ったのです。ついに協会は民間団体として、会長・木村教授、副会長・中村一教授、幹事・スミトラ・ラオ氏で、東京に設立されました。この協会は当初、東京ラーマクリシュナ・ヴェーダーンタ協会と名付けられました。現在ラーマクリシュナ・ミッションのアメリカのセンター長で、著名な僧侶で学者でもあるスワーミー・ニキラーナンダが1959年にインド大使館で協会を発足しました。こうして協会は私的な団体としてスタートしました。協会は信者によって運営されていたため多くの制約があったにもかかわらず、会報を発行したり、学校の教室を借りて定期的に会議を行ったりするなど、民間のグループとしてうまく運営することができていました。信者らは、講演のためにインドから僧侶を招待することもありました。そのようなことが数年間続き、ついに1974年に逗子に最初の建物を取得しました。それが協会が所有する最初の家であり、香港に拠点を置く海運会社のオーナーであるチェララム氏が建物建設のための全額を寄付しました。協会の運営のための定期的な支出について、ラオ氏はインド人のビジネスマンから寄付を募るために、大阪や神戸などさまざまな場所を訪れました。

1978年、当時ラーマクリシュナ・ミッションの副会長を務めていたスワーミー・ブーテーシャーナンダは協会の招待に応じて来日しました。目的は、協会のメンバーに会うことと、霊性に関する講演を行うことでした。ブーテーシャーナンダジーはその後、さらに9回来日し、1984年にラーマクリシュナ・ミッションの認定支部の一つとしてこの民間団体が加盟する道を開いたのです。ミッションと提携するということは、それ以降ラーマクリシュナ僧団の僧侶がその民間グループ/協会を担当し責任を負うことを意味し、そこからはミッションの支部と見なされます。この提携の後、スワーミー・シッダールターナンダ(あなたのような年配のインド人はおそらくご存じでしょう)が初代会長としてセンターの責任者に就任しました。そこで彼は、ラーマクリシュナ・ミッションの瞑想、祈りなど、ミッションセンターの毎日のスケジュールを紹介しました。

一方、最初の家(マザー・ハウス)の近くにある協会の本館は、H.R.ガズリア氏と中井ハルさんからの寄付金で、徒歩約10分の場所に建てられました。中井さんは長い間最初の建物の居住者であり、翻訳や通訳を務めていました。さまざまな方法で協会を支援することに加えて、彼女は他の資金源からも寄付を得ました。

**ゴウタム**

マハーラージ、ありがとうございます。協会の歴史を明確に詳しく説明してくださいました。そしてそれらはすべてスワーミー・ヴィヴェーカーナンダの夢、最後の願いを叶えるためである、ということがよく分かりました。さて、日本ヴェーダーンタ協会が定期的に行っている活動について、読者に簡単に知らせていただけますか?

**マハーラージ**

シッダールターナンダジーは当初から、日本語の知識がなければ日本で布教活動を行うのは難しいと考えて、日本語の学習に多くの時間とエネルギーを費やしました。実際、日本語学校に入学し、非常に良い成績を修めたので、ますます多くの信者が日本のさまざまな地域から訪れるようになりました。シッダールターナンダジーは日本語をかなりよく学びましたが、9年後、健康上の理由でインドに戻らなければなりませんでした。病気のために日本での最後の数か月はあまり何もできませんでした。最終的にシッダールターナンダジーは1993年にインドに戻りました。シッダールターナンダジーはミッション本部の人々に、「もしも私の代わりのお坊さんが見つかれば、彼のために私が日本を案内し、日本の信者に紹介します」と言いました。

さて、私自身について簡単に説明させてください。

私はラーマクリシュナ・ミッションが運営する学園の学校で三年間学び、その後、同学園の大学で三年間学びました。その大学はインドで最も有名な大学の一つでラーマクリシュナ・ミッション・ヴィディヤマンディールと言い、ベルル・マトに併設されています。この大学は全寮制男子校です。大学卒業後、1973年に同校の教師となり、1974年にはラーマクリシュナ僧団のブラフマチャーリ（見習い僧）になりました。

1980年に大学の校長に任命され、1993年までその責務を果たしました。そのような経緯から、私は学生や教師や教師以外のスタッフたちと親密な交流がありました。教育機関が主な活動の場でしたので、信者とは接触がありませんでした。しかし、1993年にラーマクリシュナ・ミッションの本部は私に、日本ヴェーダーンタ協会の長となるように任命しました。お分かりだと思いますが、日本とインドはさまざまな点で異なっています。ですので、日本在住の僧侶として日本に派遣されることは、私にとっては間違いなく大きなチャレンジでした。通常業務の性質も、男女を合わせた外国の信者と交流しなければならないという意味で、変わらざるを得ませんでした。

約束通りシッダールターナンダジーは私に付き添って日本で約三週間滞在した後、インドに戻りました。その後、私は一人取り残されましたが、日本についても、交流すべき信者についても、ほとんど知りませんでした。

さらにラーマクリシュナ・ミッションの当時の事務長が、過去8，9年間、日本のセンターはあまり成長をしなかった、という見解を知らせてきました。そして私にセンターの成長に注目するように、と指示を出しました。そのことから、もし私が日本語学習に時間を費やせば、他の重要なことがらがおろそかになり、協会の状態は現状のままで成長しないだろう、という結論に至りました。そこで私は最初からセンターの成長に焦点を当てました。もちろん、日本語会話を学び、日本人の信者と親密な関係を築くことも急を要することでした。そして、年月を重ねるにつれて、他の多くの活動も行われるようになりました。

次に、本協会の活動の概要についてご説明します。

まず、シュラインがあります。シュラインは、朝と夕方に信者と一緒に瞑想し、マントラを詠唱し、聖典を読む場所です。それだけでなく、早朝から夜遅くまで開いているので、誰でも入って瞑想することができます。また、毎月サットサンガを実施しています。（キリスト教会の日曜礼拝同様です）　私の前任者であるシッダールターナンダジーは、月に一度、全日のサットサンガを行うという伝統を始めましたが、この伝統は今でも続いています。そのスケジュールは、ヴェーダのマントラ詠唱、聖典朗誦、霊性に関する講義、質疑応答、ランチプラサード（神様のお下がりをいただく）、賛歌、で構成されています。またインド大使館においてバガヴァッド・ギーターの講義も毎月行っています。これらに加えて、日本のさまざまな地域の多くのグループを訪問して、その人たちのために霊性のプログラムを行います。実際、コロナウイルスのパンデミックが始まる前、私はほぼ毎月これらのグループのもとに行っていました。ほとんどの場合、マントラ詠唱、霊的がテーマの講義、質疑応答、誘導瞑想の3時間のプログラムでした。数年間、私は東京(複数のグループが存在する)以外にも、大分、福岡、熊本、大阪、山形、仙台、札幌、今治、多治見、名古屋、浜松、沖縄など、日本各地の多様なグループを定期的に訪問し、ヴェーダーンタ、シュリー・ラーマクリシュナ、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダのメッセージを詳しく説明しました。また、信者のための夏季リトリートも開催しています。年に一度、ホテルや寺院のゲストハウスの部屋を借りて参加者が約2〜3日間滞在し、夜明けから午後9時まで集中プログラムに参加することができる、というものです。夏季リトリートのプログラムには、瞑想、ヨーガ体操、観光、夜の集会などもあります。私達の目的は、自宅から離れて2〜3日集中的にトレーニングを行い、理想の人生とは何か、どう生きるべきかを少しではありますが示すことです。

それに加えて、シュリー・ラーマクリシュナ、ホーリー・マザー・シュリー・サーラダー・デーヴィー、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの生誕日を、儀式的な礼拝を含む特別なプログラムで祝っています。シュリー・ラーマクリシュナとスワーミー・ヴィヴェーカーナンダは宗教の調和を信じていたので、主イエスとお釈迦様の生誕日も祝います。これはラーマクリシュナ・ミッションのユニークな特徴で、同様の祝賀会は、インドと海外のラーマクリシュナ・ミッションのすべての支部で開催されています。また、私たちは個々の面談もします。というのは、人々は自分の心や霊性についての問題やその他のことについて私たちと話しをしたい、と望んでいるからです。彼らは自分自身の霊的、哲学的問題についても私達と話をしたいと思っています。

これらのこととは別に、協会は多数の出版物を出版しています。興味のある人に届けるには出版が不可欠ですので、日本語の出版物は約50冊にも及びます。インドの言語と英語以外の言語の出版物として、現在、日本語の出版物数は最大です。また、隔月刊の日本語雑誌も発行しています。

また、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの祝賀会も行っています。他の外国のセンターとは異なり、私たちはほとんど二か国語でやりとりをしていることは意義深いことです。協会のウェブサイトやコミュニケーション手段のほとんどが英語と日本語の二か国語であるため、興味のある外国人が私たちの活動を知り、参加することができます。

また毎朝、希望者には元気の出るメッセージを日本語で発信することで、この国の人々に精神的、知的、霊的なサポートをしています。これら活動のおかげで、少なくとも5万人の日本人がシュリー・ラーマクリシュナとスワーミー・ヴィヴェーカーナンダについてある程度の知識を得たり意識を持つようになりました。スワーミージーのヨーガ・シリーズ［二］を研究しているグループもあります。たとえば、日本最大のヨーガ・グループの1つは、シラバスにスワーミージーの4冊のヨーガ本を含めています。また、毎月、横浜の公園でホームレスのための福祉活動「ホームレス・ナーラーヤナ」を実施しています。ここでは食料品や古着を配っていますが、今年は東京のラチナ・クラブが古着を集めて協会に送ってくださったものを配布しています。また、2011年の津波の際には、救援物資を被災者へ何度か送りました。このように財源不足と人手不足にもかかわらず、私達はこれらの社会奉仕にも象徴的に参加しています。インドではそのような慈善活動の範囲は広大ですが、明白な理由から海外ではあまりできません。協会には、読書と貸出ができる図書室もあります。

**ランジャン**

マハーラージ、ありがとうございました。

さて、この国での活動で直面した課題について説明していただけますか？　そして、どのようにして日本人とインド人をヴェーダーンタ協会にうまく一つにまとめているのでしょうか？

ヴェーダーンタ協会にやってくる日本人が、ヴェーダーンタ哲学の難しい概念を理解するのに必要な霊的基盤を育んでいることは、おどろきです。どのようにヴェーダーンタ哲学を日本語で理解させ、彼らを組織本体に組み入れたのですか？　私は、素晴らしいチャレンジだと思います。日本でこれほどの成功を収めたインド人の団体は多くありません。あなたが直面した課題は何ですか？　そしてそれらをどのように克服したのでしょうか？　私たちの読者はこのことを非常に知りたいと思います。

**マハーラージ**

私が日本に来た1993年以来、私が学びを通して観察し、認識した事実は、かつては仏教のおかげで日本人のインドに対するイメージは非常に高かったということです。明治維新で近代化を進めたとき、日本は欧米をモデルとしましたが、その時に態度が変化したのです。お釈迦様の国としてのインドの高いイメージは下落し始めました。というのは、インドがイギリスに征服され、そのうえ貧しい国だったからです。

日本人にとって、偉大な国とは経済的にも軍事的にも強力な国のことです。平均的な日本人にとって、そのことが国の偉大さの基準でした。独立後何年もの間、インドは経済的にも軍事的にも強くなかったので、平均的な日本人にとってインドの地位はかなり低いものでした。しかし、前世紀末からインドが発展し、経済力と軍事力が大幅に増大し、主に情報技術が開花したことで、インドのイメージは改善され始めました。

インド人として私が注目してほしいもう一つのポイントは、インドと日本の人と人とのつながりの確立が、基本的に欠けている、ということです。日本の学校で生徒たちは、世界の宗教を含む異文化文明を知ります。しかし非常に残念なのは、教科書にはキリスト教、イスラム教、仏教、さらにはユダヤ教の詳細な記述が載っているのに対し、ヒンドゥ教とインドについての記述はほんの少しの些細なものしか載っていないことです。したがって平均的な日本人はインドとヒンドゥ教について正しい考えを得る機会がほとんどない、それが最も残念なことなのです。ですので、私たちが、インドやインド文化に関心を持つ日本の大学生のために、インドやインド文化についての講演を随時開催していることは、大事なことです。今は、教授と共に学生が協会にやってきたり、学生向けのインドに関する講義をインターネットを使って行っています。

先ほど、この協会を運営する上での私たちが直面する課題について質問を受けました。その回答として、私たちは時折いくらかの財政問題に直面していることを告白しなければなりません。多くの仏教団体とは異なり、私たちのあらゆるプログラムは無料です。それには、食事の提供も含まれています。また、私たちの機関の運営は、主に寄付に頼らざるを得ないのですが、寄付は収入源としては変化が多いです。私たちは、本を含む宗教品の販売が収入源となっていますが、私たちの収入は減少しています。幸いなことに、コロナのパンデミックのことを考えて、心の大きな個人が私たちに寄付を送ってくれるので、私たちは非常に感謝しています。

もう一つ考えなければならない事実は、ほとんどの日本人が仏教徒であるにもかかわらず、彼らはほとんど信仰を実践していない、ということです。いくつかの理由で、宗教は今や平均的な日本人にとって、余分なこととは言わないまでも、単なる伝統行事になっています。例えば、1月1日に神社に参拝することは、その神社の神々に対する真の信仰と尊敬からではなく、単に伝統に従うために行きます。霊性への真の関心は日々低下しています。日本人は素晴らしい性格的特性を持っているのに、ますます唯物論的で無神論的になっていることは大変憂慮すべきことです。彼らは次第に世俗的な喜びが好きになっています。ちなみに、アメリカ人も世俗的哲学主義を追い求めていますが、その中には何百万人もの宗教志向の人々もいるのです。けれども、平均的な日本人は今や霊性や宗教にあまり関心がありません。彼らは誰かが宗教や霊性に興味を示せば、その人は頭がおかしい、と思うのですよ。

そこに私たちは手を貸します。世俗的な生活を送れば送るほど、その人は緊張し、ストレスを感じることは確かです。日本人は確かに平安と高潔さを望んでいますが、それらを得る手段に気づいていません。したがって、彼らはさまざまな場所を探しますが、最終的には失敗します。彼らは宗教団体からあまり助けられていないし、な教育も受けていません。家族は子供に行儀作法は伝えても、平安と幸福を得るために最も重要な霊的な価値観は伝えないのです。

一方、ほとんどのインド人は霊性と宗教に深く根ざしています。霊的インドのビジネスマンや訪問者が日本に来て現地の人々と会うとき、会話の中で宗教や霊性に関することが出ても、日本側の人間は全く関心を示しません。

現在の状況の中で幸福と精神的平安を得るためには、物質的なものも霊性も必要です。この場合の霊性は因習的なものであってはなりません。それは普遍的で、調和的で、合理的で、オープンであるべきで、それこそがヴェーダーンタ哲学の特徴なのです。ヴェーダーンタは、非常に古く、霊的で、哲学的な伝統ですが、現代的、合理的、普遍的、調和的でもあります。これこそが日本に必要な宗教で、私たちがこの国に広めようとしていることです。

オープンで合理的な宗教を求める日本人のみなさんは、私たちのアシュラムを訪れ、私たちのプログラムに参加します。彼らはヒンドゥ教の寺院でクリスマスとお釈迦様の祝祭日を祝うのをみて、心躍らせます。毎週日曜日の朝、私たちはヴェーダのマントラとバガヴァット・ギーターを唱え、キリスト教の聖書と仏陀の教えと預言者ムハンマドの教えを読む特別な礼拝を行います。つまり、私たちは宗教の調和について単に話すだけではなく、それを謙虚に実践しようとしているのです。そしてそのことは私たちの日本の信者と訪問者に感銘を与えます。そのようにして、彼らはシュリー・ラーマクリシュナとスワーミー・ヴィヴェーカーナンダ、そして私たちの組織に共感するのです。例えばヴィヴェーカーナンダの祝賀会のようなプログラムがあるときはいつでも、シュリー・ラーマクリシュナとスワーミー・ヴィヴェーカーナンダ、そしてヴェーダーンタとラーマクリシュナ僧院をよく知り愛する日本人とインド人の両方が出席します。さらに、彼らは自発的に互いに調和して、一緒になってそのようなプログラムをうまくまとめるように働きます。

私たちのヴィヴェーカーナンダ祝賀委員会は、インド人、日本人、知識人、主婦、ヨーガの先生、キリスト教の司祭などで構成されていることにお気づきだと思います。彼らは本当にさまざまな人びとで社会の代表例です。委員会自体が、私たちがいかに調和的であるかという事実を明らかにしています。日本人もインド人もそのことに感動し、私たちの活動に参加するモチベーションにもなります。また、これらはすべて自然な方法で起こるのです。

**ランジャン**

マハーラージ、ありがとうございました。長年にわたり継続的に開催なさっている東京でのヴィヴェーカーナンダ生誕祝賀会について、もう少し詳しく教えていただけますか?

**マハーラージ**

すべてがどのように始まったかをお話ししましょう。以前は協会が主催するそのような社会一般に向けた祝賀会はありませんでした。興味深いことに、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダが初めて日本の地を踏んだのは1893年で、私は彼の訪問から1世紀後の1993年に日本の地を踏みました。1993-94年はスワーミージーの来日100周年であり、それはこの国のスワーミージーの信者や崇拝者にとって非常に重要な出来事でした。スワーミージーの来日100周年を毎年祝うことはできないので、私はこの特別な状況を利用することを考えました。私は1993年11月に来日しました。その年、シカゴの宗教会議におけるスワーミージーの演説100周年祭がコルカタのネタージ・インドア・スタジアムにて7日間連続で盛大に祝われました。世界中の国々から多くの信者や学者が出席し、私はその壮大なイベントの儀式の司会を務めるという機会に恵まれました。その経験が鮮やかに心に残っていたので、私はスワーミージーの来日100周年を祝うことにしたのです。私はこの組織を手伝ってくれる日本人もインド人も知りませんでした。また、当時私は日本人の信者のことをほとんど知らなかったので、ほんの数名の日本人信者の助けだけで、祝賀会をすることは不可能でした。年配の経営者でラーマクリシュナ・ミッションの元学生だった故ジョーティルモイ・レイ氏が、1994年のサラスヴァティ・プージャの際に、私をBATJ（東京ベンガル人協会）に紹介してくれました。私はこれを、祝賀会を組織する絶好の機会だと思いました。なぜなら、インド人はすでにスワーミージーのことをよく知っており、彼に敬虔な愛情を持っていたことと、インド人の支援がなければ祝賀会を組織することは難しかったので、このイベントを成功させるために私たちを助けてもらいたかったからです。そこで、私はシャマル・カル氏、ランジャン・グプタ氏、パルト・ゴーシュ氏、その他数名に祝賀会のアイデアを紹介しました。すると全員が祝賀会をサポートし、そのために働く、と申し出てくれました。最大の制約は、イベントの資金調達でした。ホールの予約、飾りつけ、イベントの宣伝、ふさわしい講演者、軽食、などを手配しなければならないし、他にも大小さまざまなことをしなければならず、そのためにお金が必要でした。幸いなことに、マハラジャ・レストラン・チェーンのオーナーであった故シブジ・コタリ氏が、このイベントのために100万円を寄付してくれました。このことから私は、神様の仕事を行うことになると、お金が問題になることは決してない、と気づくことができたのです。このことは私の経験ですが、無報酬の仕事に従事している他の僧侶の経験でもあります。私たちは目黒にある公民館を祝賀会のために押さえました。インド大使閣下をはじめ多くの要人が講演し、多くの信者や崇拝者がプログラムに参加したので、イベント全体が大成功でした。

これにより、私たちは毎年スワーミージーの生誕日を祝うようになりました。またこのイベントは、日本の学者や宗教の指導者やその他の日本の著名人を招いて考えを分かち合う場となり、さまざまな文化プログラムを開催する場にもなりました。さらにこのイベントは、日本人、インド人、その他の外国人も参加するので、スワーミージーのメッセージを広めるのに役立ちます。協会の出版物の展示・販売をしたり、日印関係に関する展示をすることもあります。このことは多くの来場者に感銘を与えています。

**ランジャン**

スワーミージーに感謝します。

あと5分あるので、新しい質問をするのではなく、私自身の意見をシェアさせてください。マハーラージがおっしゃった祝賀会では、インド人と日本人の両方が垣根なく協力しています。その秘密を教えていただけますか？　それを達成できる組織は多くありません。

**マハーラージ**

オーケー。2点あります。まず第一に、シュリー・ラーマクリシュナは「ジュガボタール」つまりこの時代の預言者とみなされていることです。この時代の預言者は調和の預言者であり、世界をそのあらゆる相違と調和させることができる人でなければなりません。それと同時に、この物質的なシナリオの中で平安と充実感を経験するために、世界は霊的価値も必要としています。そして私たちは、シュリー・ラーマクリシュナとスワーミー・ヴィヴェーカーナンダの中に「調和と充実した人生」というメッセージを見いだします。

二つ目は組織です。僧侶が運営するヴェーダーンタ協会という組織の存在の動機は、ただ一つです。その動機とは、シュリー・ラーマクリシュナとスワーミー・ヴィヴェーカーナンダのメッセージを広め、日常生活の中で同じことを実践することです。

最後に言いたいことは、シュリー・ラーマクリシュナ、シュリー・サーラダー・デーヴィー、スワーミージーがこの協会を祝福してくださっているということと、協会の円滑な運営と成長に向けてさまざまな形で貢献し、現在も貢献している多くの信者や信者以外の個人、組織、施設が存在している、ということです。現在の広がりを考えると、彼らとそれらすべてに対して感謝に堪えません。ここに、インド大使館、BATJ、日印協会、インド経済界、日本ヨーガ療法学会、故チェララム氏、ガジュリア氏、シブジ・コタリ夫妻、スミトラ・ラオ氏、中井はる氏、奈良毅教授、シリル・ヴェリアト教授、佐藤洋子氏、ヴィヴェーカーナンダ祝賀委員会のメンバーなどの名前をあげたいと思います。

**ランジャン**

マハーラージ、ありがとうございます。

今日は日本ヴェーダーンタ協会の役割、たとえば、インド人と日本人をより親しい間柄にすること、インドの文化と霊性を一般に広めること、そして特にラーマクリシュナ-ヴィヴェーカーナンダの魂をゆすぶられるようなメッセージと日本におけるヴェーダーンについて、非常に有益で興味深いお話を聞くことができました。

終わり

［一］木村日紀：日本ヴェーダーンタ協会初代会長　日蓮宗権大僧正、立正大学名誉教授、1931年までインド・カルカッタ梵語大学講師。

［二］『ラージャ・ヨーガ』『バクティ・ヨーガ』『カルマ・ヨーガ』『ギャーナ・ヨーガ』